

1-9 シサムウエペケレ「ピリカ チャペ アレス」解説

語り手：貝澤とうるしの

解説：萱野茂

萱野：これは、同じ uepeker [昔話] でも、普通は sisam uepeker [和人の昔話]。

貝澤：sisam uepeker だ。

萱野：シャモ [和人] の方の uepeker [昔話] ということで、よく、aynu uepeker [アイヌの昔話] と言って、aynu だけが語るんでなく、aynu の事だけを語るんでなくて、いわゆる、昔のその日本人のことを題にしたことをも、この uepeker という物語の中で出てくるんですね。

今の場合は、私は一人住まいの女であった。子供もいないし、家族もおらないので、一匹の猫を養っておった。その猫は非常にいい猫で、何年も何年も子供のようにかわいがっていた。ネズミもどっさり捕るし、たった猫だけを友として生活をしておった。

けども、その猫に物を食べさすときには、必ず、囲炉裏の中から、いわゆる木灰、直接でなくて、炭の上で白くなった灰のところを、ちょっと取って、コソコソとご飯の上にかけてやる。と、いうふうに私はして、その猫を養っていた。それは、粗末にするとかそういうことではなくて、そうしたのものには、いわゆる、木灰が薬になるんだと、そんな風なことを、知っておったのでそのようにしておったと。

何年も養っておったのに、その猫はどうしたのか、ある月から行方が分からない。いくら探しても、わからない。どこか行って死んだのだろうか。ななんて、一人で悲しみながら、毎日、今日はくるか？ 明日は帰って来るか？ と、楽しみにしておった。

けれども、それもとうとう見えないし、ある春に、道路のへりずっとフキを切りながら、山の方へ入っていった。ずうっと山へ入っていくと、そこで家もあるはずのない所で、一軒の家があって、そこできれいな女の人が、一生懸命自分で自分の頭をなで、頭に櫛をかけながら、そこへ、ひよいに行った。「さあさあ、入っておやすみなさい。」と、いうわけで、そこで、まあ、ちょっと、疲れもしたし、入って休んだ。

そしたら、いろいろと、ごちそうの支度をして、「さあさあ、食べなさ

い」。お膳にいっぱい、ごちそうを盛って出してくれた。けれども、そのお膳のごちそうには、灰（あく）をちんまりちんまりと、かけてあった。「どうして、こんなにおいしいごちそうにこうするんだろうな？」って、そんな風に考えたんですが、それもその、あんまり気にもしないで、まあ十分に食べて、ごちそうになり終わったら、その女の人の言うのには、「実は私は、あなたに養われておった猫ですよ。猫でも、犬でも、一か所の家で何年も養われるということは、遠慮するというか、そういうことで、私は自分から身を引いて、この村へ、猫の村へ帰ってきておったんですよ。そしておったら、あなたが、私のことを考えては泣くので、あなたの泣いた涙とか、そうしたのが、私の食べ物の中に入るので、どうしても、食べることもできないし、私がいなくなった理由をあなたに聞かすべく、今日は来てもらって、ごちそうするときにも、私に食べさせてくれたと同じように、その、こうちょっと木灰をかけた。それでも、嫌がらずに、食べてくれたので、本当に嬉しかったんですよ。養ってもらったお礼に、今晚はあなたの家へ、食べ物とか、着物とか、そうしたものをいっぱい運びますから、早く帰って、家で寝て、夜、夜中どんな音がしても、決して起きだしたりしてはいけませんよ。」と、言われた。

それで、「ああ、猫だったのか。」と、思いながら家へ帰ってきた。「早めに寝ろ。」と言われたので、早く寝ると、その夜は多くの人が、出たり入ったり、出たり入ったり、そんな音を聞いて、朝になってみるとたくさんのお食べ物、たくさんのお着物が届けられてあった。まあ、猫が昨日言ったように、「あなたには、お礼として、たくさんのお食べ物や、お着物を届けますから。」と、言われたとおりに、こんなにたくさんのおものが、来たんだな。と、感謝しながら、それを食べて、それを着て、なに不自由なく、私は生活をしておりました。だから、犬を育てても、猫を育てても大切にするんですよ。と、一人のおばあさんが、言いました。

という、これは、**sisam uepeker** [和人の昔話] という事でした。こういう **uepeker** [昔話] の中でも、ずいぶん、まあ、そういう、何とかな、生活の中で、犬を大切にしなさい、猫を大切にしなさい。そういう、教えるような、あれあるね。

貝澤：ある、ある。

萱野：子供たちにもな、あばあさんを大切にしたら、どうだとか。よく言われたもんだ、俺も。